

ロインと別れた一行は、校舎を出て、広場でこれからの段取りを決めた。

時計塔が示す時刻は、十四時半。

ロインに再会するのは夕方。

ロインが用意してくれるという資料を踏まえ、本腰を入れて話をするとなると、時間がかかると見ておいた方がいいだろう。おそらく陽が沈む。

夜は、馬車が出ていない。

ということは、今日はこの街に泊まることになる。

「一泊分の荷物を持って来ておいてよかったな」

ネックがぽんぽんと麻袋を叩いた。

「あとは……」

宿の確保だ。

「今日、やたら人多いけど宿とれんのか？」

「市場の西に、大きな宿があるって」

リアムが手を後ろで組みながら、「さっき皆で食事をとったところがあるでしょう？ その店員さんが宿屋のおかみさんと知り合いで教えてもらったんだ。部屋を用意できるかもしれないって」

「じゃあ、俺も行くよ」

ネックが賛同すると、ノランは自分の持っている市場で売るために持ってきた荷物をパンツと叩き、「そしたら、二人が宿とってる間に俺とノアはこれ売ったら市場の観光しながら晩飯の調達でもしてくっかな」

ということで、一行は一時、^{いちじ}二手に分かれて行動することにした。お互いの用事を終えたら市場の出口で落ち合う算段だ。

先刻の雨に洗われた、真っ青な空が広がっている。一行は再び長い階段を下りていく。途中の小さな公園では、子どもたちが嬉しそうに駆け回っていた。

階段を下りきり、街に戻って来た一行は、街の三方に分かれる三叉路に立って声を掛け合った。

「じゃ、あとでな」

「ああ」

「ノアも、あとでな」

「う、うん」

ノアはネックとリアムが並び、街中に消えていく姿を目で追った。

「俺たちも行こうぜ、ノア」

「うん」

威勢の良いノランの足音と共にノアは歩き出した。